２０２０年2月１０日

～毎月１０日は人権を考える日～

部落問題と部落史に学ぶ（その②）

戦の絶えない時代の皮革需要（戦国時代）

中世の時代、非科学的・不合理な「ケガレ」と「キヨメ」の意識が社会構造や人々の生活と結びつき、「差別」が生まれてきたと言われています。そして、「ケガレをキヨメル」ことが必要になり、この役割を果たすことのできる「河原者（かわらもの）」といった人たちが登場してきます。（人権のチラシ 2020 年 1 月 10 日号）

> 当時の人々は、天変地異・死・出血など、通常の状態に変化をもたらす力をケガレと呼びました。人間や動物の死体を処理する仕事や、天災をしずめるための神にかかわる芸能の仕事に加え、鉄を溶かす技術、皮を柔らかくする技術、庭を造る技術なども現状を変えるという意味からケガレに触れるとされました。ケガレは放置すると心身に付着し、災いをもたらすと考えられました。
>
> （「指導に役立つ『同和問題　基礎資料』」　愛媛県教育委員会人権教育課　より）

戦国時代に入り、下剋上の世の中になりました。身分の流動化が激しくなり、身分そのものがはっきり固定していませんでした。河原者と呼ばれた人々の中から大名になった人もいたようです。（高等学校人・権同和問題学習「人間の輪」愛媛県人権同和教育協議会）

この時代、軍需品としての武具や馬具が大量に必要となりました。それによって、戦国大名たちは、皮を柔らかくする特別な技術をもち皮革業を生業としていた人たち（中世に河原者と呼ばれていた人たち等）を確保して保護する一方、「かわた」という身分に編成し統制していきました。

しかし、「ケガレ意識」や、彼らと彼らの仕事に対する賤視し意識と差別はさらに強まっていったと考えられています。「農民が自分たちの家で飼っている牛馬が死んだとき、自分たちの手で処理したら長期間穢れ（ケガレ）、動物を処理する人たちに頼めば一日の穢れですむ」（筆者要約）（「これでわかった！部落の歴史　上杉聰　解放出版）といった資料（1558 年「諏訪下宮物忌量事」）も残されています。

牛馬は、室町時代頃から江戸時代頃にかけて、「農耕民族」と言われる日本の農家にとって、重要な家畜でした。また、倒れた牛馬からは、多様な生産物が生まれます。皮革製品のほか、日本の伝統工芸にとってはなくてはならない「ニカワ」などです。牛馬は余すところなくつかわれました。戦国時代は、戦いに出陣するためには、相当な皮が必要で、この皮の調達次第で戦いの勝敗も決まったとまで言われていたようです。さらに、江戸時代頃には、「牛の皮一頭分が、米一石」の価値であったようです。（一石：大人が１年間に食べる米の量）

現在は、肉食は当たり前に行い、バッグやベルトなどの装飾品も私たちの生活には欠かせないものです。その陰には部落差別とのかかわりがあることを、正しく認識してほしいと思います。

参考文献　「部落史に学ぶ１」外川正明　解放出版　　「人間の輪」愛媛県人権教育協議会
「これでわかった！部落の歴史」上杉聰　解放出版
「指導に役立つ『同和問題　基礎資料』」愛媛県教育委員会人権教育課

西条市人権教育協議会　　西条市人権擁護課